私が私の誕生日を全力で祝う本

井中まち

ハッピーバースデー
トゥー
ミーーーーーーー！！！！！！

☆私からわたしへの
誕生日プレゼント一覧☆彡

作家気分インタビュー …… 04

手作りスイーツ …… 06

モノより、思い出 …… 08

次回作のケツ叩き …… 12

特別インタビュー

井中まち　～私、そしてわたし～

――まずはお誕生日、おめでとうございます。

井中　あっ、そうですね。そういえばこの本はちょうど私の誕生日に発行されるんでしたね。ありがとうございます。すっかり忘れていました。なにせ今まだ11月なので（笑）

――そうですよね（笑）　〇〇歳の抱負などはありますか？

井中　ちょっと、なんでわざわざ伏せるんですか。15歳ですよ。今年も無事15歳になりました。……そうですねぇ、抱負……とくにないですね。

――ない？

井中　はい、ないです。強いて言うなら「生きること」でしょうか。昔、バイト先の偉い人に「目標のない人生なんて意味がない」みたいなことを言われたんですけど、そもそも人生に意味なんてないと思うんですよ。だいたい、当時はまだ十代だったんですけど、そんな若造が薄っぺらい「人生の目標」なんてもの掲げても――あ、いや、違います、今も十代です。15歳なんで。まあとにかく、抱負とか目標なんて人生には必要ないですよ。少なくとも私の人生にはね。

――なるほど。たとえば商業デビューしたいとかは……

井中　ないですね。私に商業作家は無理です。いろんな意味で。それに、私は私が大好きなので、私さえ喜んでくれるならそれでいいんですよ。もちろん、たくさんの方にその喜びを共有していただけるのなら、それに越したことはありませんが。感想ください。

――そうですか。ご自身で代表作として挙げるなら？

井中　やはり『幻影譚』シリーズでしょうね。「大人も男性も楽しめる少女小説」というコンセプトの架空歴史ファンタジーなんですが、これはもう私のすべてと言っても過言ではありません。あくまでも現時点での話ではありますけどね。高校卒業後すぐに書き始めて、書いてはエタり、書き直してはエタりを繰り返してようやく現行バージョンに辿り着きました。かれこれ10年以上の付き合いになります。

――……15歳なんですよね？

井中　はい、15歳です。つまり5歳になる前に高校を卒業していたということですね。天才なので。

――すごいですね。

井中　はい。

――影響を受けた作品は？

井中　『幻影譚』を書くにあたって、ということでしたら田中芳樹の『アルスラーン戦記』、酒見賢一の『後宮小説』はまず挙げておかないと怒られるレベルです（笑）。文章の書き方については谷崎潤一郎の『文章読本』を常に意識しています。あとは漫画ですが、田村由美の『ＢＡＳＡＲＡ』と渡瀬悠宇の『ふしぎ遊戯』はもはや血管の中に流れてますね。やはり幼いころに触れたものは印象深いといいますか……まあ、まだ15歳なんですけど。

――ありがとうございました。最後に何かメッセージを。

井中　私には何か崇高な志があるわけでもないですし、ともすれば「不真面目」と思われることもあるかもしれません。けれど、小説に向ける思いだけはわりと本物です。どうせ書くなら、何かを感じていただければ嬉しいですね。それから、大好きな私へ。今年も15歳の誕生日おめでとう。これからも私が大好きな私のままで、好きなものを読んで好きなものを書いて好きなところへ行って、楽しい人生を送りましょうね。ずっとあなたの一番のファンです。ありがとうございました。

♡大切なあの人に手作りスイーツを贈ろう！

ハッピーラッキークッキーミラクル！　今年もこの日がやってきたね！　そう、私の誕生日だよ！

年に一度の特別な日……せっかくなら、心のこもったプレゼントを贈りたいよね。

心をこめる、といえば、手作りスイーツ！　あ、もちろん手作りじゃなきゃダメだなんて言わないよ！「んまー！　冷凍食品ばっかりのお弁当!?　愛情が感じられないわ、子どもがかわいそう！」とか言う者どもは狂気の山脈にハヴァナイストリップしてもらおうね！（ちなみに私は独身だよ！）

ただまあ、ぶっちゃけこんなネタのためにお金はかけたくないもんね。というわけで、今回はお金がからなくてそれなりに私がおいしくいただけてなんかネタになるやつを作っていくよ！

そしたらもうコレしかないよね！　そう！

蘇（そ）だねー。

うん。蘇だね！　今若い女性に大人気の蘇だね！

～蘇～

「古代のチーズ」ともいわれる、日本最古の乳製品の一種である。その歴史は飛鳥時代にまで遡ることができ、渡来人が仏教とともに持ち込んだ乳文化や加工技術がその礎となっているという。牛乳を煮詰めただけのきわめてシンプルな食べものだが、非常に味わい深い。

時代が下るにつれて乳文化が衰退し、また貴族の独占物であったために蘇は日本の食文化に根付くことなく姿を消した。

現在では正確な製法や形状はわかっていない。

※今回は一般的に「これじゃね？」って言われてる作り方でやっていくよ！

材料　牛乳

1．牛乳（このくらいなら固形になるまで煮詰めても己が耐えられるわって量）を鍋とかフライパンとかなんか適当に入れて焦げないように混ぜながら固形になるまで煮詰めよう！　地味につらいよ！

↓

2．できあがり♡（蜂蜜をかけるとさらにゴージャスリッチな「蘇蜜（そみつ）」っていう貴族オブ貴族な食べものになるよ！　藤原道長が好んだとか糖尿病の治療薬として食べてたとか言われてるよ！）

なんかこう適当にラップに包んで棒状にして冷蔵庫で1日寝かせて切ったもの。なんとなく寝かせたほうがおいしいような気がする。コーヒーによく合う。バナナではない。（このレシピに砂糖とバターを加えると生キャラメルになる）

♡素朴かつ奥深い味わいでおーいしーい！　藤原氏の栄華を感じるね！

♡大切な人へのプレゼントは蘇！　これできまり！

特集 活ナマコをさばく

※一部ショッキングだったりグロテスクだったりする表現があったりなかったりするかもしれません。

年の瀬も押し迫った、ある日のことである。私は正月休みに入りヒャッホイ状態にある頭で考えていた。考えていたこととはつまり、この本のことである。

ネタが、ない。

奇しくも3月21日、我が誕生日にちょうどテキレボ8が重なるということで、『私が私の誕生日を全力で祝う本』を新刊として持っていくという強い意志はかなり早い段階で固まっていた。しかしよく考えてみれば、ネタが、ないのである。

私が私の誕生日を全力で祝うとは、いったいどういうことなのか。なにをすればよいのか。

誕生日は3月だ。確かに3月である。だが、印刷所の早割を最大限に利用させていただくには3月に入ってからネタ探しなど悠長なことはしていられない。こんな頭の悪いお祭り本にそんなに印刷代や時間を割いてたまるか。私は真面目な文庫本を大量に作りたいのだ。

なにを……私は私になにを贈ればよいのだ……この3月感が微塵も感じられぬ師走の朝に。そう、首をひねっていたときである。

玄関のチャイムが、鳴った。

こたつから抜け出す。立ち上がって数歩踏み出す。足がもつれる。半ば倒れこむように、あるいはすがるようにドアノブに手をかけた。静電気がパチッと音を立てたが構いはしない。濃厚なネタの香りに引き寄せられて、私は夢中でドアを開けた。

果たしてそこに立っていたのは、運送屋の青年であった。

「印鑑かサインをお願いします」

おお、おお。よかろう、いくらでもやろう。その手にあるものが本のネタになるのであれば、私はなんでも差し出そう。ネタが。私は新鮮なネタが欲しいのだ！

――それは一瞬の出来事であった。

「どうもー」

と爽やかに青年が去ったあと、我が手に残されたのは発泡スチロールの箱であった。

伝票の差出人欄には、はるかなる地、青森（ブルーフォレスト）に住む親戚の名。そして品名欄には、「活ナマコ」の文字があった。

ネタだ。

新鮮なネタが届いた。

そこで私は思い至ったわけである。誕生日プレゼントは、なにも「物」でなければいけないということはない。何事にも代えがたい「経験」でもよいのである。

食べものとして、私はもともとナマコが好きだ。その味はすでに何度も経験済みである。青森産のナマコはじつに美味い。だが、今までは調理されたものしか送られてこなかった。「活ナマコ」というものは、未経験なのである。

「活ナマコ」。つまり、「生きているナマコ」。

この手でさばかねば、食うこと叶わぬ。

私は唾をのんだ。

やるか、この手で。やるのか。ナマコを。

よし、やろう。

躊躇はほんの数秒で消え去った。正直に言って、ナマコはぜひともさばいてみたい。生物として興味深すぎるのだ。この「活ナマコをさばく」という経験は、私の私による私のための誕生日プレゼントに相応しく思えた。

発泡スチロールの箱を封じるガムテープを、ゆっくりと剥がす。蓋を外す。あの特有の、キュッとこすれ合う音と、軽く間の抜けた音がした。

そして私は、ナマコの集団と対面したのである。

……キモい。

えー、キモい。

待って。こんなにいっぱい入ってるとは思わなかった。いっぱいいる。ナマコいっぱいいる。すごい。わー、すごい。キモい。

ナマコである。所狭しと詰められたナマコである。大小様々な、ナマコ。が、うぞうぞと動いている。

私は基本的に虫などに嫌悪感を抱かないが、芋虫系だけは苦手である。ナマコは芋虫とは違う、それはわかっている。そしてナマコも三体くらいまでなら「ナマコだなー」とふつうに見ていられる。だがしかし。だがしかし、だ。

これはもはや暴力。視界の暴力。

え？　ナマコってこんなにキモかったっけ？　すごい！　集団ナマコすごい！　すごいキモい！

私はそのとき、魚介類を憎み、それをモチーフに数々の邪神やその眷属などを生み出したというラヴクラフトの気持ちがなんとなくわかったような気がした。

とはいえ、こんなところでは終われない。

私は、ナマコが、食いたい。

それ以上にさばいてみたい。

意を決して、ナマコの海（それは文字通り小さなナマコの海であった）に手を突っこんだ。
「アッヒョ」
その瞬間、私はグーフィーになった。
ぞわぞわする。指先から腕を伝って背骨まで、ぞわぞわが這い上がってくる。まだナマコに触れてすらいない。それなのに、あまりの光景にぞわぞわが止まらないのだ。
キツイ。思った以上にキツイ。ナマコの海に私の手が入っているという事実だけでこんなにもキツイ。
しかし、私も青森の血を継ぐ者である。負けられない戦いが、ここに、ある。
グッとナマコを掴んだ。名状しがたい感触。ナマコだ。
「ナマコだ」としか言いようのないナマコ感だ。
わずかな水音を立てて、私の手の中のナマコはついに海を離れた。ナマコ一匹、私ひとり。その間には、もはや隔てるものはなにもなかった。
そう……一匹になってしまえばこっちのもんである。
私はナマコの集団に恐れをなしていただけで、単体のナマコであれば敵ではない。知らず、口の端が上がった。
ナマコをまな板の上にそっと横たえる。包丁を握り、軽く叩く。こうすることでナマコは緊張して身を硬くし、さばきやすくなる。クックパッドの教えである。
師曰く、まずは両端（口と肛門）を切り落とせ、と。
それはほぼナマコのすべてと言ってもよい。ナマコには脳も心臓も血管もなく、ただひたすらに口から砂を食べ、腸で栄養を吸収したあと、肛門から搾りかすの砂を排出して生きている。口と肛門は、ナマコの生命そのものなのだ。
それを、切る。私が。この手で――
切った。サックリ切った。
どうせここに来た時点で食われる運命なのだ。人間はそうして生きているのだ。
適度な硬さで切りやすかった。この切り落とした部分は硬すぎて食すには向かない。さようなら、口と肛門。
次は腹を縦に切る。触ってみてなんとなくやわらかいほうが腹である。ここを切れば珍味である腸管や卵巣が出てくるはずである。が。
ない。
この個体、内臓が、ない。
いや、もともとナマコには腸と精巣、卵巣くらいしかないのだが、それにしたってあまりにも体内が空っぽなのである。
なるほど、こやつ、吐いたな。腸を。

ナマコには、敵に襲われると腸管を肛門から放出して逃げるという性質がある。ちなみに1〜3か月も経てば腸は完全に再生される。イミフすぎる。

つまりこのナマコは、己の腸を犠牲にして生き延びた、歴戦の勇士だったわけである。

感慨深かった。そうしていま、私の手でさばかれるこのナマコに、なんと声をかければよいのかわからなかった。

まあ声をかけたところでどうにもならないので、私は彼の筋肉を取り除き、次の個体に手をかけた（筋肉は取り除かなくてもよいが、取り除いたほうが食べやすくなる）。

もはや私に怖いものはなかった。ナマコの海に手を突っこんでも、まったくぞわぞわしなかった。

「キミに決めた！」

と、万年めざせポケモンマスター男よろしく掴んだナマコはたいへん活きがよかった。

口を切り落とし、肛門を切り落としたそのとき、事件は起きた。

たとえるならば、「ブジュルッ」。

そのような効果音が黒背景に白抜きの不安定な文字で書かれていそうな感じで、勢いよく内臓が飛び出したのである。

「ラ、ラ、ラヴクラフトーーーー！」

私は叫んだ。事実だ。

おそらくは、それが彼の最後の抵抗だったのだろう。非常に効果的な攻撃であった。心臓が飛び出るとはこのことか、と思った。

が、すぐに「珍味だ」と思ったのも事実である。

私は比較的冷静に、彼の腹を裂いた。その間も内臓は海水とともに押し出されて私の指を撫でた。

そういうことを、何度、繰り返しただろう。いつしか私は、歌を、口ずさんでいた。

「花舞うあなたの空に　命よ息吹いて　安らぎの色に……」

わかる人にだけわかってほしい。たぶん「あー」ってなる。「あー」って。気になっちゃってしょうがないグロ耐性のある18歳以上のおともだちは『沙耶の唄』で検索してみてほしい。

そうして出来上がったナマコの酢の物を、私は噛み締めて食べた。おいしかった。

内臓はいずれ塩辛にするため、タッパーに満たした塩水の中で保存してある。その見た目は、ザ・内臓である。

それを見るたびに、思う。——生きていた。

あの時、あの瞬間、彼らは確かに生きていたのだ。

暁を抱いて眠れ

冒頭お試し版

腹の底から息を吸う。

開いた喉を通り、冷えた空気が入り込んでくる。それはティセの体内であたためられて、旋律を伴い鼻先から抜けてゆく。

硝子張りの天井から降りそそぐ光に、歌声が溶けた。

アルク・アン・ジェ大聖堂の壁は音を吸わない。すべてはじき返して、響かせる。けれどむやみに反響させるのではなく、適度に抜け道を作って音を濁さないようにしてあるのは、さすがだ。なにせ千五百年もの歴史を持つ聖地なのだ。幼いころによく逃げ込んでいた、掘っ立て小屋のような村はずれの礼拝堂とはわけが違う。

ティセがここで歌うようになって、もう五年になる。

どうすればこのすばらしい空間を活かすことができるのか、よりうまく共鳴させられるのか、熟知していた。

朝露よりも透明だと評される高音を、思いきり遠くまで飛ばす。でも、張り上げるようなことは決してしない。足の裏から頭のてっぺんを抜けて、天までまっすぐに届くような、それでいて天空から包み込むような、やわらかな響き。それが、求められているものだ。

全身を柔軟に、伸ばすように使う。息をよくまわして、針に糸を通すように細く送り出す。何度も、何度も練習して、ようやく体に覚え込ませた基本から、髪の毛一本ほどもはみ出さないように歌った。

変声前のわずかな期間、少年たちだけに許される、聖歌を捧げる行為——それを専門にしているのが、「歌手」だ。

ティセは十歳のときに大聖堂の歌手になった。それから一日たりとも、練習を欠かしたことはない。ティセのうしろに並んでいる少年たちだってそうだ。

ただ、ティセはだれよりも美しい声を持ち、なおかつ熱心だった。だからこうして、ほとんどの曲で独唱を任されている。

ほかに音のない、静謐な祈りの場に、ティセの歌声だけが響く。

その瞬間が、唯一、ティセの喜びを感じられるときだった。

ただ、ひたすらに神を想って歌う。その間はいっさいを忘れられる。一対一の神との対話だ。邪魔するものはなにもない。

熱さを感じるほどになった体を震わせて、この曲でいちばん高い音を正確に狙う。

揺るぎのないロングトーン。

その儚い余韻を残して、独唱は終わった。

典礼を終え、大聖堂を出ると、そこには静謐とはほど遠い光景が広がっていた。

ひしめきあう、人、人、人。

みな、近隣諸国から逃げ込んできた人たちだ。

聖都アルク・アン・ジェはどの国にも属さない。ゆえに信徒ならばだれでも受け入れられる。

このところ、聖都の外では戦争が激化しているという。海の向こうの大陸からやってきた異教徒たちが、このドラグニア小大陸全土を我がものにしようとしているのだ。

父や母や、弟も、もしかしたら難民の群れのなかにいるのかもしれない。

そうは思っても、探してみようという気はティセには起きなかった。

人混みを縫って歩く。ときおり、「もっと歌っておくれ」と声がかかる。そのたびにティセたち歌手の列を率いる「老師」が、難民たちをなだめていた。

聖歌は必ず神に届く。熱心に歌えば、それだけ信徒は救われる。侵略者たちを退けることもできるのだ。ただ、それゆえに歌手は、一日じゅう休まず歌い続けるというわけにもいかない。

喉を傷めては歌えない。歌手の人数も、聖歌を歌える期間も限られている。とくに大聖堂で歌うような優れた歌手の喉は、大事に守られるべきだった。

「ティセ」

と、老師が振り向いた。六人いる老師のなかでいちばん若い彼は、顔にいくつか皺を作ってはいるものの、髪はまだ黒い。「老師」とはただの役職名で、実際に老いた人ばかりではないとティセが知ったのは、歌手になってからのことだ。

「はい、イエルノ老師」

ティセが答えると、イエルノ老師はほほ笑みながら首を横に振った。声は出さなくていい、という合図だ。このざわめきのなかでは、どうしてもある程度声を張る必要がある。それによって喉がやられるのを防ぐためのことだと、すぐにわかった。

「昼食を終えたら、私の執務室に来てください。お話があります」

奇妙に甲高い声で老師は言う。指示のとおりに黙ったまま頷いて、ティセはすこし肘を引いた。難民に掴まれそうになったからだ。

イエルノ老師はもう前に向きなおっていた。ティセも倣って、まっすぐに歩く。真珠色の空から薄く光が射していた。

二月の風は、まだ、冷たい。

※この原稿作成時
本気でここまで
しか書けてません

文庫サイズ(カバー付)
百〜百五十ページくらい
五百円　で、出したい

カワズ書房の本

「大人も男性も楽しめる少女小説」を目指した
架空歴史ファンタジー
『幻影譚』シリーズ

1巻 230p・2巻 312p
文庫サイズカバー付
各 1,000 円(以下続刊)

この本に試し読みを収録した『暁を抱いて眠れ』は、
『幻影譚』シリーズと同一世界観の新作です。
(5月6日文フリ東京で出したい。すごく出したい)

↓在庫僅少再販予定なし↓

- 幻影譚二次創作アンソロジー
  『幻影たんっ☆』
  (A5/70p/500円)
- 短編集－憶－
  (文庫/52p/500円)

通販(BOOTH)もあります

https://kawazusyobou.booth.pm/

私が私の誕生日を全力で祝う本

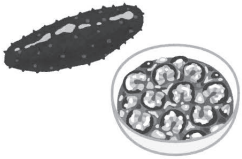
発行日　2019年3月21日
著　者　井中まち
発行者　カワズ書房
印刷所　ちょ古っ都製本工房

連　絡　nostami0v2@gmail.com
@Nostalgic_town

代表作『幻影譚』シリーズは
カクヨムで全文試し読みできます。(他にも色々あります)

→

https://kakuyomu.jp/users/nostami



カワズ書房